

吉川公雄によるバウムテスト研究の一考察

—バウムテスト文献レビュー（第三報）—

A Discussion on the “Baumtest” Studies by Dr. Kimio Yoshikawa

— A Review of the “Baumtest” III —

佐渡忠洋¹⁾・鈴木 壯²⁾

SADO Tadahiro and SUZUKI Masashi

抄録

内科医であり生態学者でもある吉川公雄のバウムテスト研究25編を、主として幹先端処理に注目しつつ批判的に検討することで、新たな臨床的知見を得ることを本研究の目的とした。吉川の研究の中で、筆者らが重要であると考えたのは個体分析、幹先端処理、生態学的視座であった。検討の結果、吉川が行った個体分析は得られたバウムへの読み手のコミットメントであり、それは臨床場面で不可欠なスタンスであって、この作業を通してこそ研究は進められるべきことを指摘した。次に、吉川の幹先端処理の考えは、発達論に基づきつつバウムと人間の成長過程を見出した知見であることから、「幹先端処理発達理論」と名付け、その有用性と課題について言及した。さらに生態学的視座では、バウムの生態学的理解とバウムテスト研究における社会的アプローチの必要性を指摘した。

キーワード：幹先端処理 ・ 個体分析 ・ 生態学的視座

I 目的

筆者らはこれまでに、わが国のバウムテストに関する文献を収集し、それらを精査してきた（佐渡・坂本・伊藤，2010；佐渡，2010a）。その過程で、吉川公雄が関わった諸研究に興味を惹かれた。それは、バウムを理解する上で極めて重要と考えられる幹先端処理を一貫して扱っており、バウム理解に生態学的な視点を導入しているためである。しかしながら、幹先端処理を提唱した研究（藤岡・吉川，1979）を除いて、吉川が関わった研究はそれほど注目されてこなかったようである。

そこで本研究は、吉川が関わったバウムテスト研究を、主として幹先端処理（apical termination）に注目しつつ検討することで、新たな臨床的知見を得ることを目的とした。

II 概観

1. 吉川公雄という人

吉川は、著書等から以下のような人であることがわかる。

1925年に大阪で生まれる。1950年に大阪市立医学専門学校（現大阪市立大学医学部）を卒業し、翌年医師国家試験に合格。1952年大阪市立大学理工学部研究員となり、1957年から1968年にかけて同大学の東南アジア学術調査隊の一員としてタイ、カンボジア、ベトナム、ラオス、マレーシア、ボルネオで人類・生態学的調査を実施。1978年には京都府立医科大学の客員講師として教鞭をとり、吉川診療所（内科・心療内科）を開業しつつ、国立民族博物館研究協力者にもなっていた。

吉川は内科医でありながらも、医師免許取得後、ゴキブリやハチの生態学の研究に力を注いでいる。ハチを対象とした研究成果をまとめ、

1) 岐阜大学保健管理センター／Health Administration Center, Gifu University

2) 岐阜大学教育学部／Factory of Education, Gifu University

1961年には『Introductory studies on the life economy of polistine wasps』との題で北海道大学より理学博士を授与された。そして最初の著作である『社会性昆虫』も生態学に関してであった。バウムテスト以外の業績は、末尾の《吉川の業績》にまとめておいたので参照されたい。

2. バウムテスト研究

筆者らは吉川の本バウムテストに関する研究を25編検索した。そのほとんどが共著であるが、本稿ではこれらを吉川の研究と考えた。それらの研究を年代順に並べて通し番号をつけ、末尾の《バウムテスト研究》に記した。以下、引用に際してはこの通し番号による略記を用いる（例えば、通し番号①は研究①、通し番号②は研究②）。

バウムテスト研究は、幹先端処理を提唱した藤岡喜愛^{註1)}との共著論文に始まる（研究①）。本論文は今の時代に読まれても新鮮であり、完成度は極めて高い。また、後の研究はこの研究①を発展させる形で展開し、18編の『人間生態学的研究』として纏めている。その調査地域は、北海道の最北端から鹿児島奄美大島にまでわたる。邦文献を吟味した限り（佐渡ら、2010）、吉川ほど広範囲なデータを収集・吟味した報告はなく、わが国のバウムテスト研究において貴重な資料といえる。

吉川がバウムテストを用いるのは、本技法の非言語的特徴を評価するためである（研究①）。そして、得られたバウムを描き手のトータル・イメージとしての自己像と考え、その自己像を人間の成長と対応させて把握していく時、個体の在り方の把握に有効であるとする。したがって、バウムテストはロールシャッハ法に比して通文化的研究で用いやすいのである。描かれたバウムをトータル・イメージと理解する点が吉川の特徴であり、これは後述する幹先端処理でも重要となってくる。

また吉川（研究⑨）は、バウムテストを体系化したKarl Koch（1906-1958）の写真をわが国で唯一掲載している。この点も吉川の貴重な業績と考えられるので、本稿に再掲したい（図1）。

3. バウム理解の方法

吉川はバウムを読み解く上で幹先端処理からのバウム類型、空間配置、トラウマ指標、描画の強化、根の数に注目し、これらを含めて独自の診断基準を作成した。ここでは幹先端処理を除く観点を簡潔に紹介しておきたい^{註2)}。その後、筆者らが注目した個体分析、幹先端処理、生態学的視座を詳細に検討する。

空間配置はGrünwaldの空間象徴図式を踏まえた解釈であり、吉川はバウムの占めた空間の位置づけも（吉川は、空間利用性と呼んでいる）、幹先端処理と同様に描き手のパーソナリティの統合性を反映していると考えている（研究①）。しかし、この空間象徴理論が本邦に正確に紹介されていないこともあってか（岸本、2010）、その解釈の理論的根拠は弱いように思われる。

トラウマ指標にはヴィトゲンシュタイン指標を用いている。この指標は、ある程度以上の大きさや強さで心理的影響を受けた場合に現れるとされている。吉川は自らの経験から、本指標からトラウマ体験を算出できるのは、バウムの高さが描いた時の実年齢まで発達している場合であるとし、算出結果はおよその見当をつける程度とした方が無難である、と慎重な態度を見せている（研究②）。



図1 Karl Koch（研究⑨）

描画の強化 (drawing reinforcement) はバウムの表現の中で部分的に強い筆圧で濃く彩られている表現を指し、その表現をRe-徴候 (Re-Zeichen/Re-token) と呼ぶ (研究②)。枝付着部 (枝元) に最も多く見られ、描き手の一種の強調性や顕示性の表れであり、トラウマほどの強烈な刺激によるものではないが、描き手の無意識的な抵抗や精神的抑制が働いている部分に表れると考えられる。

根の数は研究⑦から言及されはじめた。吉川は根を木と大地を支える地下の生命と考え、描き手の無意識や目に見えない生活体と関係があるとした。そのため、根には描き手の生得的な特徴 (後の生態学的視座で述べるエソロジカルなもの) が表現されると考えていたようだ。しかし筆者らは、この解釈仮説は象徴的に理解できても、即自的に臨床場面へ導入することは無理があると考えている。

診断基準とは、以上の4点と後述する幹先端処理を加味して、15歳以上の描き手のバウム理解に適用される解釈システムである (研究⑥)。これは、7段階でバウムのトータル・イメージを分類する。その基準を見ると、バウムを評価するにあたっては、まずバウムの特徴と描き手の実際の年齢との対応を幹先端処理による類型から見る。さらに空間配置で、傾きが認められれば評価を下げる。幹先端処理が自然になされているかを吟味して、処理が完結していれば評価を上げる。枝先が開放している場合は分化が不十分と判断し、評価を下げる要素となる。描画の強化が認められれば評価を下げ、描線はその成熟度 (描線がなめらかであれば評価は上がる) を考慮する。この基準は曖昧さを残すが、ここから吉川がどのようなバウム特徴を上位に据えていたかが読み取れる。つまり吉川は、なめらかな線で描かれたバウムが中央に配置されて傾きがない方が良く、トラウマ指標と描画の強化は認められず、幹先端処理は年齢程度、もしくは年齢よりも高次の類型で描かれることを求めているといえる^{註3)}。

これらの他にも、描き手の身長に対する体重の相関比とバウムとの関係も検討したが、結局この解釈仮説は言及されなかった。描き手の身

体にも注目しており、吉川の理解の対象が描き手の全人的なものであったことを推測させる点である^{註4)}。

Ⅲ 個体分析

1. 個体分析とは

吉川は描き手それぞれに個体番号を与え、得られたバウムのほぼすべてを論文に掲載し、個々のバウムの特徴を記述している。個々のバウムの特徴を一つ一つ丁寧に記述する行為が、吉川の言う個体分析 (individual analysis) である。描き手を“個体”と名付ける点に生態学の影響が見えてとれる。

2. 根底にあるスタンス

個体分析は単なるバウム形態の記述ではない。読み手によるバウムへの主体的で積極的なコミットメントであって、バウムを素材とした読み手のこころの作業といえる。

Kochも、このようなバウムの読み込みを重視している。それは「その外観は何を意味し、次いで、あれこれの指標は何を意味するか。その答えは、バウムの絵それ自身から自然に生じるものでなければならない。(中略)当初はわからない部分をそのまま持ちつづけ、どう理解したらいいかという問いを、何日も、何週も、何ヶ月も、何年も、見え方の成熟過程がある地点に達するまで問い続けていると、秘密に関わる何かが自然と姿を現してくる」(Koch, 2008 [1957] ; 岸本, 2005の訳より) との記述に表れている。吉川の個体分析はこのKochのスタンスと類似していると考えられる^{註5)}。

両者に共通したスタンスは、本来すべてのバウム理解で求められるものであろう。例え、ある集団のバウム特徴を見出す研究であっても、そこに研究者の仮説が影響している以上、個体分析はバウム理解においては必須の作業であるからである (個体分析の結果を論文に掲載するかは別にして)。昨今、ある指標に合致したバウムを度数に置き換え、統計学的分析を行って、その分析結果からのみ考察を展開させる研究が多いが、生の素材であるバウムそのものから知見を得ようとしているこのスタンスは、現在の多くの研究に欠けている点である。したがって、

個体分析は臨床や調査などの場面、研究の方法論も問わない基本的スタンスに他ならない（佐渡，2010b）。

上記の理由から、個体分析を通して紡ぎだされた知見は、この作業を行わずして得られた知見と比べて、その理解や解釈の深みに違いが生じるにちがいない。次に述べる幹先端処理もまた、個体分析の成果であると筆者らは考えている。

IV 幹先端処理

1. 重要視する根拠

藤岡とともに幹先端処理を提唱して以来（研究①）、吉川は徹底して幹先端処理を重視した。その理由は次の二つにある。

第一に、バウムとは描き手の自己像であり、自己像とは一つのトータル・イメージであるとすると、各種指標を用いてバウムを細分化するような方法には問題がある。そのため、トータル・イメージを保ちつつバウムを大まかに捉える方法が良いが、そのためには幹先端処理の視点が有用と考えたからである。それは幹先端が「バウム画全体を表象する可能性をもつ構造部」（佐渡・坂本・伊藤，2009）だからである。

第二に、幹先端処理は人種や種族を問わず、バウム描画で必ず伴う課題であるので、通文化的研究で有用だと考えたためである。この点に関しては、後の生態学的視座で再び論じる。

2. 類型の観点と図式化

吉川は発達と成長に基づいた幹先端処理のバウム類型を重要視する。この姿勢は、類型の図式に端的に表れている（図2・3）。

検査の開発や理論の発展において、発達論は必須の検討事項である。バウムテストを体系化したKoch（2008 [1957]）も、58指標の発達にともなう推移を検討している。吉川の場合、バウムが描き手の自己像であると考えため、バウムと人間との発達はパラレルな関係にあるとし、発達にともなうバウムの発展過程を類型の観点から明らかにしようとしている。そこで筆者らは、吉川の幹先端処理の理論を「幹先端処理発達理論（theory of apical termination based on development）」と名付けたい。

当初の理論は研究①に纏められ、いくつかの

類型が提唱された。その後、子どものバウムの検討から、新たな類型と特殊な類型（表1）を見出した^{註6)}。吉川は最終的な類型図を示していないので、筆者らが工夫を加えて図式化したものを図4に示す^{註7)}。

3. 類型と発達

最初期のバウムは幼児不定型（Ii）から始まる。これは、幼児の最初期のバウムが明確な樹木の形態をなしていないことを示している。したがって、人物画で最初期に円様の表現が認められるのと同様に（Kellog, 1969/1998）、最初に現われるバウムは後のすべてのバウムの原型で、萌芽といえる表現（Edinger, 1992）である。

次にバウムは幼型（I）の段階に発達する。幼型の中でも最も未分化な類幼型（Io）に発達した後、いくつかの類幼型（Mo・Po・Bo・Co・Ho・Ro）に発達する^{註8)}。図2において、幹先端開放型がこの幼型から推移することが矢印によって示されている。このことは、樹木の形態として奇異な開放型は、幼型の発達段階への心理発達の固着ないしは退行から生じることを示しているのかもしれない^{註9)}。

小学生にもなると、幼型のバウムから未熟型（Juvenile type；Mi・Pi・Bi・Ci・Ri）へと発達する。その際、人型（H）を通る場合もあれば通らない場合もあるとされている。人間もバウムも立像であるという共通点に加え、子どもにアニミズム的思考があるとするならば、バウムに両手様の枝がつけられることは想像に難くない。少なくとも、この段階以降、人型系のバウムは認められなくなる^{註10)}。さらに、バウムは未熟型からバナナ型（M）、ヤシ型（P）、基本型（B）、冠型（C）、放散型（R）に至るとされている。吉川はこの段階の総称を述べていないが、便宜上、前成人型（Pre-Adult type）としておきたい。前成人型では、幹先端処理で描き手各々の方略が明瞭に現れている。そして最終的に、バウムは成人型（Adult type）へと達する^{註11)}。この過程は必ずしも固定的なものではない。したがって、ある段階を飛び越えて次の段階に発達することもあれば、1年後の再検査でより低次のバウムが描かれる

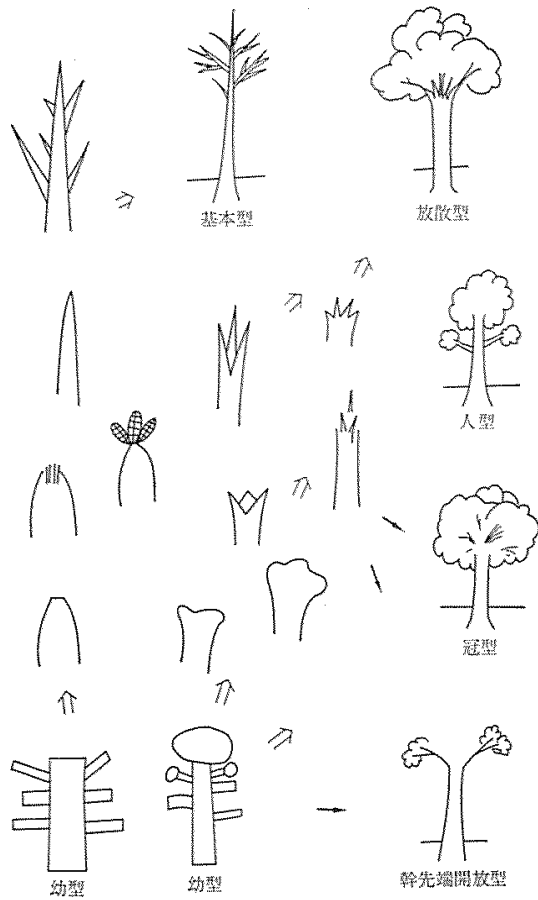


図2 初期の移行図（研究③）

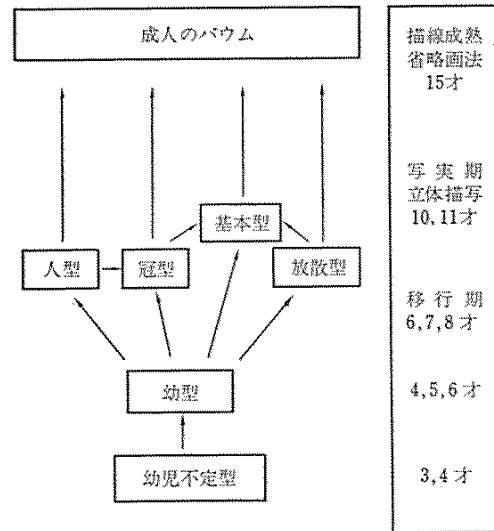


図3 初期の成長図（研究①）

表1 吉川の特種な類型

型	記号	説明	初出
Trunk type	T	幹だけのとき	研究②
Abstract type	A	抽象型のバウム	研究②
Fungus type	F	キノコ型	研究②
Basic type(branch)	B(b)	枝だけを描いたもので、その枝が基本型 の一部として認められる場合	研究②
Basic type(abstract)	B(a)	基本型ではあるが、模式化され、抽象傾向を帯びている場合	研究②
Grass	G	草本科のものを描いた時	研究②
Non-drawing	No	描けない場合	研究①

場合もある。また、バウムの発達には「地域的にも、国別にも、かなりのずれがみられる」（研究①・⑱・⑲）ため、解釈には留意を要する。

4. 独創性

上述したように、「幹先端処理発達理論」で

は、バウムと人間の発達は幹先端処理の分化の程度を平行な関係にあると考え、描き手の特徴は幹先端処理の分化の程度から読み取ることが可能と考えている。この理論の中で、筆者らは次の三点が独創的だと考えている。

第一に、幹先端の処理は3～4歳のバウムか

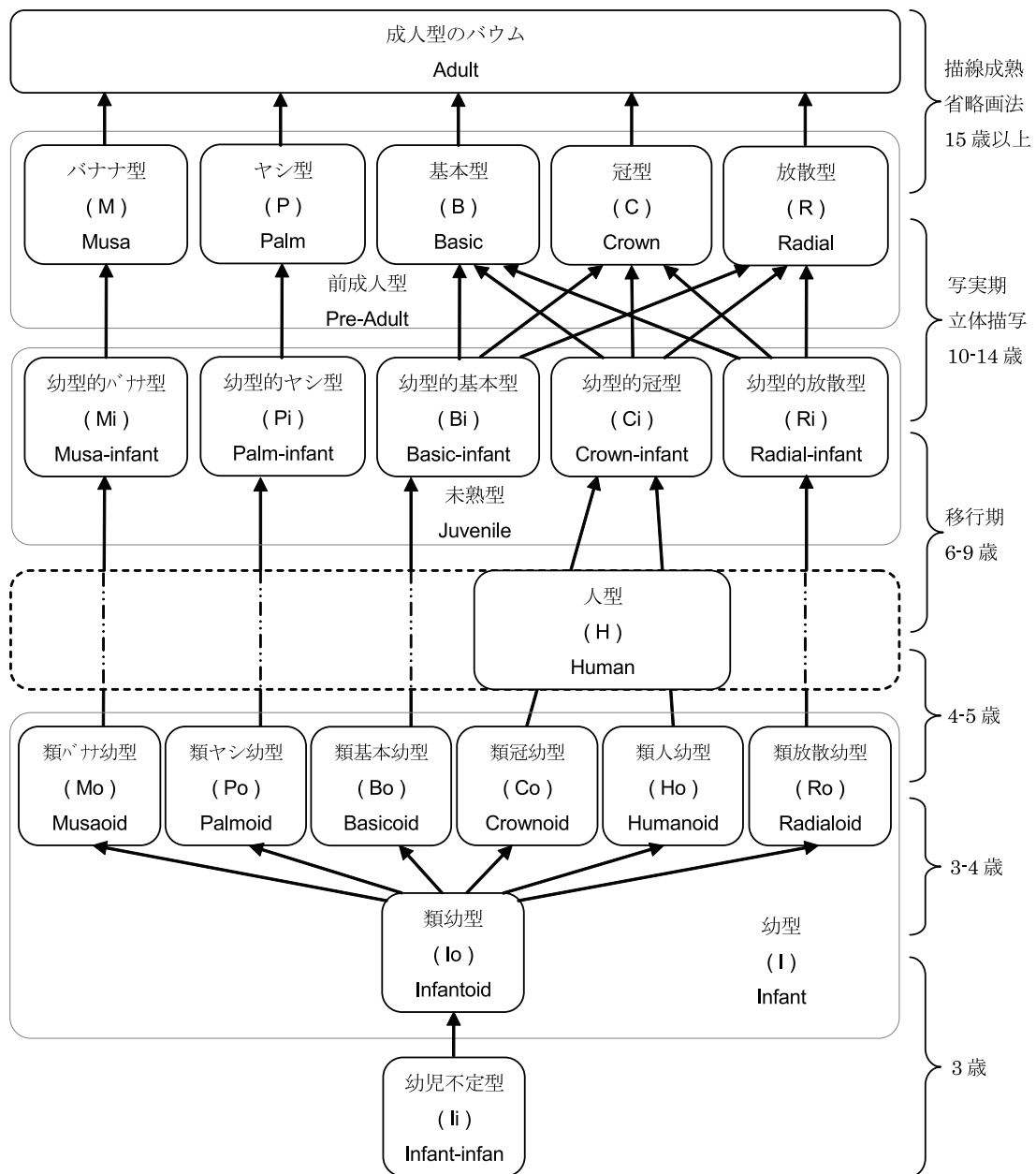


図4 幹先端処理発達理論の図式化

ら（幼型から）すでに行われており、この段階で後の類型の片鱗が現れていること、成長にともない処理がなめらかになることを指摘している点である。これは今後、幹先端処理の知見を洗練させていく上で基盤となる知見である。

第二に、吉川は放散型、冠型、基本型を三大分類と呼び、わが国で頻繁に認められるとしているが、同様にバナナやヤシの樹種も体系化した点である。これらは熱帯や亜熱帯のアジア諸国でよく認められる樹種（類型）であるが、わ

が国では稀有なバウムであるため、研究者によっては“特殊な類型”と分類するかもしれない。我々に馴染みのないバナナやヤシのバウムでも、他の樹種と同様に幹先端の処理は行われ、その程度は描き手の成長にともない分化することを見出したのは、吉川の国際研究の成果といえる。

第三に、各類型の間には特殊な関係、つまり移行可能性が存在することを見出した点である。図5は、類型の関係を吉川が図式化したものである。矢印の向きは関係の方向を、太さは関係

の強さを示している^{註12)}。図4・5からすれば、各類型で移行しやすいものとそうでないものがある。バナナ型系のバウムを描く者が基本型、冠型、放散型へ移行する可能性は低いことは容易に首肯できる。特徴的なのは、幹先端処理を枝分かれさせて閉じる放散型から、幹先端処理の閉鎖を放棄して樹冠によって包み込む冠型への移行ににくいことを見出した点である。つまり、幹上部を枝分かれさせるか否かという方略の相違は、描き手の特徴を強く反映しているのだと考えられる。

以上の点は、他のバウムテスト研究がなしえていない知見である。そのため、吉川の業績はもっと注目されてもおかしくない。

5. 他の分類法との比較

幹先端処理のその他の分類法はわずかに報告されている。その中でも筆者らは、幹の内空間が外空間と隔てられているか否かに注目する岸本(2002)の分類法が有用であると考えている(表2)。それは岸本の分類法が「木の下から湧きあがってくるエネルギーに対してどのように描き手が対処しようとしたかという《動き》と、描き手がどのようにそのエネルギーと折り合いをつけて木としてまとめたかという《おさまり》の双方を量的に処理し得るもの」(佐渡ら, 2009)との理由からである。ここで、吉川と岸本の分類法を比較してみたい。

再三述べたように、吉川は発達論に依拠するため、それは横軸(時間軸)による分類法と考

えることができる(図4で考えるならば縦軸)。つまり、成人のバウムに至ることを暗々裏に求めている理論とも言うことができる(未成熟なバウムを否定的にのみ理解するわけではない)。一方、岸本の分類法は心理的な境界の程度から分類を行おうとするものであり、境界の水準、すなわち縦軸(図4では説明できない)による分類法であるといえる。この場合、幹先端が適度に閉じている方が描き手は生活上適応しやすいことを暗示していると推測できる(開放型をネガティブにのみ表現しているわけではない)。このことから、両者は異なる次元を捉える分類法であることが分かる。

さらに、分類のターゲットとするバウムも両分類法で異なる。吉川の分類法は幼児から成人まで幅広い年齢層のバウムを分類できるが、岸本の分類法は前成人型と開放型のバウムを分類できる。したがって、吉川の分類法は開放型のバウムを処理できない難点を持ち、心理的境界ないしは病理の理解に課題があり、岸本の分類法は発達の観点に課題を有するといえる。筆者らは、ともに利点を持つ分類法であるから、両者を統合させる試みが必要であると考えている。中島(2008)の報告はその一つかもしれないが、項目数(類型数)が多く、また有用性の実証にはさらなる検討が必要とされている。

6. 課題

早い時期から独自の理論を洗練させてきた吉川の分類法にも、開放型の類型がないこと以外に重大な課題がある。

それは、各類型の分類基準が不明瞭なことである。吉川は分類した類型の特徴は述べながらも、厳密な形で各類型の分類基準を記述・定義することはしなかった。そのために、幼児不定型と類幼型との区別、幼形基本型と基本型との区別が難しく、最終的に到達すべきと期待した成人型がどのようなバウムかが理解しがたい。このことは科学的な研究を行う上で重大な問題である。後の研究者が吉川の分類法を採用しなかったのも、この分類基準の不明瞭さを克服できなかったためだと推測される。

吉川もこの課題は認識していたようで、「幹先端処理は事実上かなり困難な、表現上の問題

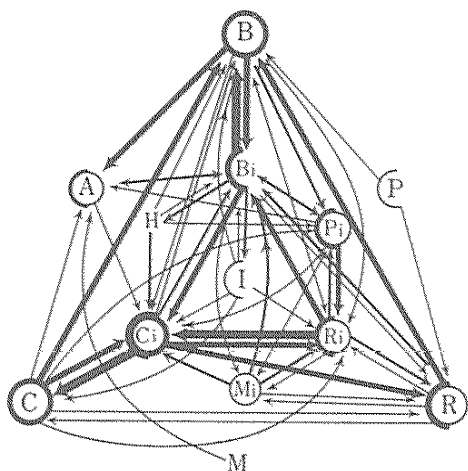


図5 類型間の関係図(研究③)

表2 岸本の幹先端処理の分類法 (岸本, 2002)

類型	基準
開放型	幹の内空間が、気の外の空間とは何らかの形で隔てられているもの
完全開放型	幹先端処理により輪郭閉鎖を完全に放棄したのか、あるいはまったく無関心とも受け取れる型
閉鎖不全型	先端漏洩型と冠漏洩型以外の方法で先端を閉じようと何らかの努力をしているが、うまくいっていないもの
先端漏洩型	幹の先端、もしくは枝先が先細りになって閉じようとはしているが、完全に閉じていないために、幹の内空間が外界と交通してしまう型
冠漏洩型	樹冠が描かれているが、その輪郭に隙間が2カ所以上あるため、やはり幹の内空間が外界に漏洩してしまう型
閉鎖型	先端が開放しているために、幹の内空間と外空間が交通している状態
冠型	幹先端の処理を放棄して、樹冠の輪郭を描くことで全姿の輪郭を閉じているもの (樹冠と幹の間の隙間以外に、隙間が1カ所以下)
放散型	幹先端処理にあたって、幹の先端をそのまま枝分かれさせる型で、樹冠の有無を問わないが、樹冠がない場合は先端が閉じていなければならない
基本型	幹先端が一本のまま細くなってそのまま閉じ、幹の上部には同じように描かれた枝がおおむね互生しているもの
その他の閉鎖型	冠型・放散型・基本型以外の閉鎖型 (注: 岸本の論文には記述されていない)
その他	一線幹とか、全体が描かれていなくて、開放・閉鎖の区別ができないなど。ただし、一線幹でも、冠線で覆われている場合は「閉鎖型」(冠型)に分類。

であって、そこにはさまざまな移行型を生み出すことになる」(研究①)という指摘を早期からしている。また、幼型と未熟型の混合型の存在も認めている(研究⑥)。しかし、吉川はそもそも発達という“過程”に注目していたとするならば、初めから基準の作成など目指していなかったとも考えられる。発達と言うスペクトラム上にバウムを位置づけることは、それ自体、困難な作業であろうし、分類基準を明確にしていくことは発達過程の視点を害する結果になるのかもしれない。

指標の基準の問題はバウムテスト研究全般に認められる(佐渡ら, 2010)。したがって、我々バウム研究者は、吉川の一連の研究を通して、幹先端処理から見たバウムの成長プロセスという知見を得るだけで甘受しなければならない。この点ですら、他の研究ではなされなかった貢献であるのだから^{註13)}。

V 生態学的視座

吉川が生態学的研究に従事していたことは既に述べた。生態学の権威である今西錦司^{註14)}の論文集に執筆していることからして、吉川が生態学領域にかけたエネルギーは相当量であり、その見識も確かなものだったのであろう。したがって、吉川のバウム論を理解する上では、彼に影響を与えた生態学の視点が重要となってくる。ここでは生態学とバウムテストとの関係に絞って論を進めたい。

1. EEC理論

吉川は、人間の在り様をエソロジカルなもの、エコロジカルなもの、カルチュラルなもの、三層から理解しようとし、これをEEC理論と呼んでいる(図6)。まず、人間の行動は、最深層にエソロジカルなものを包含しており、これは文化や学習とは無関係な本能的行動である。人間は本能的行動を根源に持ちながら、直面する環境に順応すべく新たな行動を習得するが、

それを吉川はエコロジカルなものとする。そして人間は動物とは異なり、カルチュアルなもの、すなわち過去から受け付いた文化的な遺産の影響を受け、備えていくと考える。吉川による赤ん坊の例でいえば、エソロジカルなものとは赤ん坊の初期に示す笑いであり、エコロジカルなものとは両親と他人とを区別した笑顔であり、カルチュアルなものに笑うしぐさや言葉つきとなる。

このEEC理論は吉川の研究のほとんどで言及されている。したがって、バウムテスト研究においては、バウムとEECの三層との関連をみるのが吉川の興味であって、そのためには個体発生とバウムとの関連を検討することが求

められてくる。このことから、吉川が発達論を重視したのも、生態学の影響があったと推察される。

2. 幹先端処理の普遍性

バウムテストにおけるエソロジカルなものを、吉川は幹先端の処理課題と考えている。つまり、幹先端の処理こそが、種族や人種にとらわれない、バウム描画が有する根源的な課題であるとする。

この考えから、吉川は幹先端処理の図式化を図7のように展開している。これは、EEC理論と「幹先端処理発達理論」を統合し、三次元化した図である。本図は、幼児不定型に始ったバウムが、幼型以降、適応や学習の成果がバウムに現われるために、表現の幅が広がることを示している。つまり、幼型だけをみると、民族や種族、またカルチュアルな違いを超えた共通性があり、それこそがバウム描画のエソロジカルなものなのである。

したがって、エソロジカルなものを幹先端処理で捉えることが出来るために、吉川は幹先端処理の発達から検討し、幹先端処理の普遍性を評価するのである。吉川がバウムテストを通文化的研究で有効だとするのは、幹先端処理のこの考えに立つためである（このことは、こころの病理にそれほど関心がなかったことも示唆しているため、開放型の理論がないことも理解できる）。

3. 生態学のまなざし

生態学 (ecology) という語は、ギリシア語の家庭を意味する“*οικος* (オイコス)”と、学を意味する“*λογος* (ロゴス)”に由来するとされている。そのため、この語が表すように、生態学とは生活の場での生物の研究をさし、とりわけ“生物と環境との関係の全体あるいはパターン”に注目する (Odum, 1983/1991)。このことはまさに、臨床心理学の“臨床”の語源であってベッドや寝台を意味するギリシア語の“*κλινη* (クリネー)”と相通じる。つまり、両学問とも研究対象や研究のフィールドに“同調/tune in” (山中, 2010)^{註15)} することが求められる学問である。

心理学や精神医学においても、生態学と類似



図6 EEC理論 (研究◎)

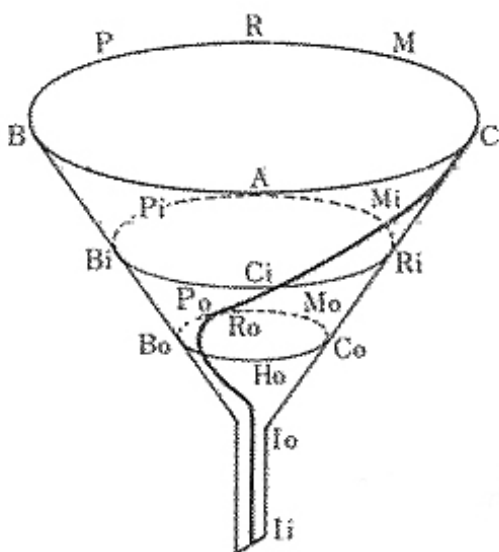


図7 バウムのEEC理論 (研究◎)

するアプローチはよく行われる。それは、いわゆる生物・心理・社会的アプローチに見てとれ、吉川もこのアプローチの重要性を指摘している。今日では、常識化した方法論ではあるが、わが国のバウムテスト研究では社会的な側面からの研究が十分ではない^{註16)}。研究の多くは質問紙法との関連、精神疾患との関連から、つまり心理的な側面からの研究に偏っている。したがって、社会的な側面に目を向けた研究は少なく、人類学者による報告がその点を補っているのが現状である。

したがって、吉川の業績はこれまでのバウムテスト研究の補償する位置にあると考えられる。さらに今後、バウムテスト研究で社会的なアプローチがなされる場合でも、基盤となる資料となっていよう。この研究のように、単なる報告に留まらず、後々まで貢献する報告が行われたのは、生態学という視座を通した、すなわち吉川が対象者の生活に根差した視点を有していたためであって、それは「臨床的」なアプローチとも言い換えることが可能ではないだろうか。

VI まとめ

幹先端処理に注目しつつ、個体分析の必要性、「幹先端処理発達理論」の発展とその限界、生態学的視座のバウム研究への寄与について述べた。しかし、吉川の後期の研究は十分取り上げることができなかつた。後期は樹種に注目し、樹種と幹先端処理との関係、樹種とEEC理論との関係から研究を行っている。また、論文内に記された数量的データについても、本稿では取り上げることはできていない。論文に掲載されたバウムを再検討することと合わせ、今後の課題としたい。

註釈

- 1) 藤岡喜愛 (1924-1991) : 京都大学理学部植物学科を卒業後、京都大学人文科学研究所助手、兵庫医科大学助教授、愛媛大学教授、甲南大学教授を歴任。大手前女子大学教授在任中逝去。医学博士。諸外国で人類学的調査に従事。ロールシャッハ法の専門家でもある。多岐にわたる学問研究の蓄積から、イメージの重要性を強調し、人間のこころは「イメージタンク」である述べ、「精神人類学」提唱した。吉川もイメージを重要視しており、藤岡との共通点はバウム論の随所で垣間見える。
- 2) 研究①で、吉川はバウムの解釈本を出版すると記している。しかし、出版には至らず、後に「人間生態学的研究」をまとめる形となった研究②が英語で出版されただけである。
- 3) 診断基準の初出はボルネオでの調査研究を纏めた研究⑥である。この報告は吉川のバウム論を飛躍的に発展させ、一連の研究の中でも重要な役割を担っている。
- 4) 研究⑩において、開腹手術を体験した外科患者、めまいを主訴とした耳鼻科患者、分娩・回復を体験した産婦人科患者のバウムを検討している。本報告は、バウムに表現された身体性を検討した報告といえるが、考察で身体性に触れられることなかった。
- 5) Kochのバウム論が、わが国へ適切に輸入されなかったとの指摘があり (中島, 1985; 岸本, 2005), この度、Kochの原著第三版が邦訳出版された (Koch, 1957/2010)。吉川は研究①から原著『Der Baumtest』の第三版を引用しており、この第三版をKochのバウム論の「決定版」としている (研究⑨)。さらに研究⑩では、自らの考えが第三版に依拠することを明示している。
- 6) 吉川は当初、類型の英訳を「type」と記述していたが、研究④より「form」と改めている。その理由は記されていないため、吉川の意は分からない。けれども、本類型の特徴を踏まえると「type」の訳語の方が妥当であるように思えるので、図4の類型の最後には「type」が入るとして理解されたい。
- 7) 吉川が最後に図式化したのは研究⑳である。図4はこの研究⑳の図を一部改変したものである。
- 8) 類バナナ幼型 (Mo) と類ヤシ幼型 (Po) は研究⑥で、類基本幼型 (Bo) と類冠幼型 (Co) と類放散幼型 (Ro) は研究⑧で、類人幼型 (Ho) は研究⑪で見出された。幼稚園児を対象とした研究 (研究⑪・⑫・⑬・⑭・⑮) を見た限り、これら類幼型の中でも発達の水準に高低があるようだ。しかし、明確な知見が示されていないため、ここでは同水準の表現としておく。
- 9) 幹先端処理は「メビウスの木」を提唱した山中 (1976) の報告によって心理臨床へ導入された。その後数人の研究者が幹先端処理の開閉につ

いて検討している。吉川は開放型をそれほど重要視しなかったようで、解釈仮説を記していない。

- 10) 研究⑩までは、人型 (H) と類人幼型 (Ho) との区別がなかった。したがって、研究⑩より前は図4の人型を「Humanoid」、研究⑩以降は図4の人型を「Human」としているのに注意されたい。なお、岸本 (2002) の分類法では人型は冠型に含まれる。
- 11) 図4から成人型のバウムは発達の目標であり、到達点であると考えられる。しかしながら、吉川は成人型のバウムがどのようなバウムであるかを述べていない (後に述べる定義の問題とも関連する)。筆者らの経験では、大学生や成人に前成人型のバウムが多く認められる。したがって、吉川のいう成人型とは、人間のあつる種の成長可能性を示すものであつて、実在しないと考へた方が妥当であらう。
- 12) これは類幼型が細分化されていない時期に図式化されたものであるから、読解には注意を要する。本図はその後、改められることはなかつた。
- 13) 指標アプローチの発展のためには、指標の定義を一度壊し、再構築していく過程が必須である。そして、その過程においては知見を包括的に吟味した上で、指標と描き手の特徴との関係に配慮しなければならない。また、幹先端処理からの類型化において、未だ満足できる基準は示されていないが、「幹先端処理発達理論」はその基準作成に貢献できると考へている。
- 14) 今西錦司 (1902-1992) : 京都帝国大学農学部を卒業し、京都大学講師、同教授の後、岡山大学教授、岐阜大学学長を歴任。理学博士、岐阜大学名誉教授、京都大学名誉教授。わが国の生態学、文化人類学に多大な影響を与え、多くの人材を育てた。吉川が今西の『古稀記念論文集』にバウムテスト研究を載せており (研究⑥)、今西がいた関西地方で生態学の研究に従事していたことからすれば、吉川への影響は想像に難しくない。
- 15) 山中は中井久夫のコトバとして紹介している。出典は確認できなかった。
- 16) 佐渡ら (2010) においても指摘したが、生物学的なアプローチも十分ではない。脳科学の急速な成長にバウムテスト研究はついていけておらず、三側面が真に相互補完的な関係になるためには、時期を待たなくてはならないであらう。

《吉川の業績 (年代順)》

1. Yoshikawa, K. (1954) On the nest evacuation : Ecological studies of polistes wasps, I. *Journal of the Institute of Polytechnics, Osaka City University. Ser. D, Biology*, 5, 9-17.
2. Yoshikawa, K. (1955) A polistine colony usurped by a foreign queen : Ecological studies of polistes wasps, II. *Insectes Sociaux*, 2, 255-260.
3. Yoshikawa, K. (1956) Compound nest experiments in polistes fadwigae Della Torre : Ecological studies of polistes wasps IV. *Journal of the Institute of Polytechnics, Osaka City University. Ser. D, Biology*, 7, 229-243.
4. 吉川公雄・生嶋功 (1956) ゴキブリ天敵としてのゴキブリコバチの寄生に関する知見. *医学と生物学*, 40 (4), 127-129.
5. 吉川公雄・生嶋功 (1956) クロゴキブリの産卵と孵化についての2,3の考察. *昆虫*, 24 (4), 232-239.
6. 吉川公雄・生嶋功 (1956) 温度変化に伴うゴキブリ行動群の推移. *医学と生物学*, 40 (5), 199-201.
7. 吉川公雄 (1956) ゴキブリ食餌沢の実験的研究. *医学と生物*, 41 (2), 77-79.
8. Yoshikawa, K. (1957) A brief note on the temporary polygyny in polistes fadwigae Dalla Torre, the first discovery in Japan : Ecological studies of polistes wasps, III. *Mushi*, 30 (7), 37-39.
9. 吉川公雄 (1957) コギブリ若虫を狩るセナガアナバチの習性. *生理生態*, 7 (1), 54-60
10. 吉川公雄 (1957) セナガアナバチの処女生殖. *生理生態*, 7 (2), 131-133.
11. 吉川公雄 (1959) アシナガバチの超個性性. 今西錦司編, *動物の社会と個体*. 岩波書店. pp. 78-89.
12. 吉川公雄 (1961) Introductory studies on the life economy of polistine wasps. 北海道大学博士論文.
13. Yoshikawa, K. (1962) Introductory studies on the life economy of polistine wasps. VI : Geographical distribution and its ecological significances. *Journal of biology, Osaka City University*, 13, 19-43.

14. Yoshikawa, K. (1962) Introductory studies on the life economy of polistine wasps. VII : Comparative consideration and phylogeny. *Journal of biology, Osaka City University*, 13, 45-64.
15. Yoshikawa, K. (1964) Predatory hunting wasps as the natural enemies of insect pests in Thailand. Kira, T., Umesao, T., Iwata, K. eds. *Nature and life in Southeast Asia*, Vol. III, 391-398.
16. 吉川公雄 (1964) なんとなく病：疾病の生態学的要因論. 思想の科学 (第五次), 24, 53-62.
17. 吉川公雄 (1967) 昆虫における家族生活の進化：とくに成虫間の個体認識の問題をめぐって. 森下正明・吉良竜夫編自然：生態学的研究 (今西錦司博士還暦記念論文集). 中央公論社. pp. 189-210.
18. Yoshikawa, K., Ohgushi, R., Sakagami, S. F. (1969) Preliminary report on entomology of the Osaka City University 5th Scientific Expedition to Southeast Asia 1966 : with descriptions of two new genera of stenogasterine wasps by J. van der Vecht. Kira, T., Umesao, T., Iwata, K. eds. *Nature and life in Southeast Asia*, Vol. VI, 153-182.
19. 吉川公雄 (1973) 社会性昆虫：とくにカリバチを中心として (生態学講座21). 共立出版.
20. 吉川公雄 (1978) 人間生態学：生物としての認識からの出発. 東海大学出版会
21. 吉川公雄 (1979) サバ紀行：その人間的記録. 中央公論社.
- ⑤ ge : Human ecological studies on Baumtest (Tree Drawing Test) 2. 生理生態, 17 (1・2), 613-618.
- ⑤ 吉川公雄 (1978) バウムテストにみる女子大生の性意識と性行動：ペッティングとコイタスについて. 現代性教育研究, 30, 87-102.
- ⑥ 吉川公雄 (1978) BAUMTEST : ボルネオにおける研究. 加藤泰安・中尾佐助・梅棹忠夫編, 社会・文化・人類学 (今西錦司博士古稀記念論文集). 中央公論社. Pp. 335-396.
- ⑦ 岩城操・吉川公雄 (1978) 現代の青年期女性にみられるイメージ形成の特徴：バウムテストによる人間生態学的研究3. 京都女子大学自然科学論集, 10・11, 1-87.
- ⑧ 中尾舜一・吉川公雄 (1978) 幼稚園児のイメージ形成の分化：バウムテストによる人間生態学的研究4. 久留米大学論叢, 27 (1), 53-86.
- ⑨ 吉川公雄 (1978) 第四部その応用への一つの道：バウムテスト. 人間生態学：生物としての認識からの出発. 東海大学出版会. Pp. 110-156.
- ⑩ 吉川公雄・緒方正美・竹林淳・前川彦右衛門・林宏輔・鎌谷正博・田中耕一 (1979) バウムテストによる疾病の臨床生態学的研究. 大阪府医師会医学雑誌, 12, 195-228.
- ⑪ 中尾舜一・吉川公雄 (1979) 幼稚園児のイメージ形成の成長：バウムテストによる人間生態学的研究5. 久留米大学論叢, 28 (1), 21-45.
- ⑫ 中尾舜一・吉川公雄 (1979) 子供のイメージ形成に及ぼす自然環境の影響：バウムテストによる人間生態学的研究6. 久留米大学論叢, 28 (2), 109-123.
- ⑬ 岩城操・吉川公雄 (1980) 現代の青年期男性にみられるイメージ形成の特徴：バウムテストによる人間生態学的研究7. 京都女子大学自然科学論集, 12, 37-74.
- ⑭ 中尾舜一・吉川公雄 (1980) 医学部進学過程学生における7年間隔に見られるイメージ形成の変動：バウムテストによる人間生態学的研究8. 久留米大学論叢, 29 (2), 99-132.
- ⑮ 中尾舜一・吉川公雄・岩城操 (1981) イメージ形成の地域特性1：大阪と九州における大学商学部男子学生の相違 (バウムテストによる人間生態学的研究9). 久留米大学論叢, 30 (1), 67-92.
- ⑯ 岩城操・中尾舜一・吉川公雄 (1982) イメージ形成の地域特性2：北海道礼分島の小学生に見られる北方系の有意性について (バウムテスト

《バウムテスト研究 (年代順)》

- ① 藤岡喜愛・吉川公雄 (1971) 人類学的に見た, バウムによるイメージ表現. 季刊人類学, 2 (3), 3-28.
- ② 中尾舜一・吉川公雄 (1974) バウムテストの人間生態学的研究1：医学部進学過程学生の調査から. 久留米大学論叢, 23 (2), 89-129.
- ③ 中尾舜一・吉川公雄 (1975) 医学部進学過程学生の調査から (承前)：バウムテストによる人間生態学的研究1. 久留米大学論叢, 24 (1), 41-63.
- ④ 吉川公雄 (1976) Cross-cultural studies on the image formation in the inhabitants of Borneo and Singapore in relation to the a

- による人間生態学的研究10). 京都女子大学自然科学論集, 14, 21-52.
- ⑱ 中尾舜一・岩城操・吉川公雄 (1982) イメージ形成と地域特性3: 奄美大島の小学生にみられる南方系の有意性について (バウムテストの人間生態学的研究11). 久留米大学論叢, 31 (1), 57-87.
- ⑲ 岩城操・中尾舜一・吉川公雄 (1983) イメージ形成の地域特性4: 北海道東藻琴の小学生にみられる北方系の有意性について (バウムテストの人間生態学的研究12). 京都女子大学自然科学論集, 15, 31-79.
- ⑳ 中尾舜一・岩城操・吉川公雄 (1983) イメージ形成の地域特性5: 北海道中央部の小学生にみられる特徴について (バウムテストの人間生態学的研究13). 久留米大学論叢, 32 (2), 129-171.
- ㉑ 吉川公雄・ロウワンインチャン・吉川尚男 (1983) シンガポール学童の行動と環境認識の発達: 予備研究 (バウム・テストによる人間生態学的研究14). 帝国学園紀要, 9, 77-90.
- ㉒ 久保和男・吉川公雄 (1983) 思春期特性の年間推移: バウムテストによる人間生態学的研究15. 帝国学園紀要, 9, 91-98.
- ㉓ 長野文典・吉川公雄 (1983) バウム類型からみた青年期女性のYG性格検査: バウムテストによる人間生態学的16. 帝国学園紀要, 9, 99-106.
- ㉔ Yoshikawa, K. ed. (1985) *Cultural ecology through Tree test*. Tokai University Press, Tokyo.
- ㉕ 中尾舜一・吉川公雄 (1986) イメージと行動: バウムテストによる人間生態学的研究17. 久留米大学論叢, 35 (2), 181-208.
- ㉖ 中尾舜一・吉川公雄 (1987) イメージと行動2: いろいろな環境要素から見た行動解析 (バウムテストによる人間生態学的研究18). 久留米大学論叢, 36 (1), 1-38.
- 引用文献**
- 1) Edinger, E. F. (1992) *Ego and archetype: Individuation and the religious function of the psyche*. Hambhala Publication, Boston. pp. 8-12.
- 2) Kellog, R. (1969) *Analizing children's art*. National Press Books, California. [深田尚彦訳 (1998) 児童画の発達過程: なぐり描きからピクチュアへ. 黎明書房.]
- 3) 岸本寛史 (2002) バウムの幹先端処理と境界脆弱症候群. 心理臨床学研究, 20 (1), 1-11.
- 4) 岸本寛史 (2005) 『バウムテスト第三版』におけるコッホの精神. 山中康裕・皆藤章・角野善宏編, バウムの心理臨床. 創元社. pp. 31-54.
- 5) 岸本寛史 (2009) コメント: 文脈とプロセスへの配慮. 竹内健児編, 事例でわかる心理検査の伝え方・活かし方. 金剛出版. pp. 86-95.
- 6) Koch (1957) *Der Baumtest: der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel*. 3. Auflage. Verlag Hans Huber, Bern und Stuttgart. [岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男訳 (2010) バウムテスト (第三版). 誠信書房.]
- 7) Koch (2008 [1957]) *Der Baumtest: der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel*. 12. Auflage. Verlag Hans Huber, Bern・Göttingen・Tronto・Seattle.
- 8) 中島ナオミ (1985) Kochの原著“Der Baumtest”とその英語版との比較参照による検討 (第1報). 大阪府立公衆衛生研究所年報 (精神衛生編), 23, 27-40.
- 9) 中島ナオミ (2008) バウムテストにおける樹型の分類. 関西福祉科学大学紀要, 11, 123-137.
- 10) Odum, E. O. (1983) *Basic ecology*. CBS College Publishing, New York. [三島次郎訳 (1991) 基礎生態学. 培風館.]
- 11) 佐渡忠洋 (2010a) 実施法と評定者間信頼性からみたバウムテスト研究の精度: バウムテスト文献レビュー (第二報). 岐阜大学カリキュラム開発研究, 28 (1), 21-32.
- 12) 佐渡忠洋 (2010b) 日本のバウムテストの研究. 臨床心理学, 10 (5), 674-679.
- 13) 佐渡忠洋・坂本佳織・伊藤宗親 (2009) バウムテストの幹先端処理に関する基礎的研究: 大学生のバウム画より. 心理臨床学研究, 27 (1), 95-100.
- 14) 佐渡忠洋・坂本佳織・伊藤宗親 (2010) 日本におけるバウムテスト研究の変遷: バウムテスト文献レビュー (第一報), 岐阜大学カリキュラム開発研究, 28 (1), 12-30.
- 15) 山中康裕 (1976) 精神分裂病におけるバウム・テストの研究. 心理測定ジャーナル, 12 (4), 18-23. [岸本寛史編 (2003) 山中康裕著作集5: たましいの形 (芸術・表現療法①). pp. 92-103, 所収.]
- 16) 山中康裕 (2010) 心理面接の神髄. N: ナラティブとケア, 1 (1), 94-96.

